

子どもたちの“やってみたい”を支える、多世代が集う居場所

みんなのBASE



仙台市青葉区五橋。ビル 1 階にある「みんなの BASE」は、中高生を中心に、子どもたちが安心して過ごせる「安全基地」としてスタートしました。

今では子育て中の保護者や、孫の付き添いで訪れる高齢者など、世代を超えた関わりが生まれ、利用者は多い日で一日 30 人、月では延べ 300 人近くにのぼっています。

みんなの BASE には、いくつもの“顔”がある



みんなの BASE では、一つの場所を拠点に、「〇〇BASE」と名付けられたさまざまな取組が展開されています。

子どもの発案から生まれた「だがしや BASE」をはじめ、地域の集まりや相談の場として使われる貸しスペース「しゅあ BASE」、保護者向けの勉強会や学びの場を開く「まなびや BASE」、さまざまな「やってみたい」という声を一緒に考え、形にしてきた「よろずや BASE」、フリースクール「ふらっと BASE」など。

こうした取組は、利用者や地域の声を受け止め、さまざまな現場に立ち会う中で、広がっていきました。

「前向きな閉鎖」がひらいた、次の居場所づくり



「労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団」を母体とする「仙台地域福祉事業所けやきの杜」は、平成 20 (2008) 年の設立以来、仙台市の指定管理者として児童館の運営や、小規模認可保育所の運営など、子どもの健全育成に取り組んできました。

その中で、かつては仙台市の児童クラブが小学 3 年生までしか利用できなかった時期に、夜遅くまで働く保護者の声を受け、“1~6 年生を夜 8 時まで預けられる民間学童”も運営していました。その後、法律の改正で対象が 6 年生まで拡大したことで、民間学童は一定の役割を終え、職員の間で「前向きな閉鎖にしよう」という言葉が交わされました。

小学生を取り巻く環境は整いつつある一方で、中高生の居場所は依然として少ない——次に必要な支援は何かを考え始めた矢先、コロナ禍が訪れました。行き場が急に少なくなった子どもたちの姿を前に、「子どもの居場所が必要だ」という想いが、職員の中で改めて強まりました。

こうして令和 3 (2021) 年、子どもの居場所としてみんなの BASE が開設されました。

児童館で学んだ「みんなで作る」視点



みんなの BASE の根っこには、施設長の瀬戸さんが児童館勤務で児童厚生員として児童健全育成に長年関わってきた経験があります。「ここで大事なことは、ほぼ、子どもたちから教えてもらいました」と瀬戸さんは振り返ります。限られた時間や空間の中で、どうすれば子どもたちが「今日、楽しかったな」と感じて帰れるのか。子どもたちの言葉や姿に向き合う日々の中で、「居場所づくり」の本質を学んできたと言います。

瀬戸さんが大切にしてきたのは、「ここは、おとなが一方向的に用意する場所ではない」という姿勢です。子どもたちもまた、関わりながらこの場を形づくっていく存在だと考えてきました。安全面などからおとなが環境を決めざるを得ない場面がある中でも、子どもたちと一緒に考え、対話しながら場をつくる姿勢を持ち続けてきました。

瀬戸さんは、日々の関わりの中で感じてきたことを、次のように話します。「子どもたちの存在があることで、周りのおとなたちの関係も自然とやわらいでいくんですね。子どもが育っていく姿と一緒に喜びながら、地域の人も、私たちも、保護者も、みんなつながっていく。そうした関係性が育まれていくことを、何度も実感してきました」。

児童館での10年以上の積み重ねが、「子どもをまんなかにして、人と人が一緒に育つ場をつくる」という、運営の考え方に繋がっています。

子どもの“やってみたい”が形になる「子ども企画書」



みんなのBASEを象徴する取組が、子どもたちの“やってみたい”を形にする「子ども企画書」です。きっかけは、利用者の小学6年生が、「引越す友だちのお別れ会をみんなのBASEでしたい」と瀬戸さんに相談したことでした。

「『コロナ禍で家に集まることが難しく、ここで2時間だけできないか』という相談だったんです。『じゃあ、どんな内容にしたいのか、何人くらい集まるのか、必要なものは何かを、紙に書いてみて』と伝えたのが始まりでした」と瀬戸さんは振り返ります。

そのやりとりをきっかけに、カードゲーム大会や窓ガラスアート、夏まつりでの駄菓子屋1日店長など、子どもたちの企画が次々と生まれていきました。そこから現在の「だがしやBASE」も誕生しています。

この日、遊びに来ていた小学生に企画書で実現してみたいことを聞くと、「カラオケ大会」「お泊まり会」「ファッションショー」など、次なる“やってみたい”の声が次々と返ってきました。

瀬戸さんは、企画書を通して生まれる変化について、こう話します。「誰かが実現している姿を見ると、『自分もできるんじゃないか』って思えるんですよね。その連鎖がすごく大事だと思っています。大切にしているのは、結果よりも“プロセス”です。どうしたいかを考えて、相談して、対話しながら決めていくことが大事。そのプロセスが、その子の自信や次の一歩につながります」。

「子ども企画書」は、子どもたちが自分の考えを言葉にし、周囲と関わりながら実行していく力を育てる、みんなのBASEらしい取組として続いています。

地域にひらかれた居場所としての工夫



瀬戸さんが大切にしているのは、おとなが“教える側”に立つのではなく、子どもの想いを尊重し、同じ目線で関わることです。「子どもとは対等でありたいと思っています。おとなだから上、ではないんです。ここは学校でも家庭でもない、唯一の『フラットな場』だからこそ、目線を合わせて、一緒に考えたり話をすることが大事なんです」と瀬戸さんは話します。

実際にみんなのBASEには、地域のおとなが関わる場面もあります。その際に大切にしているのは、「何かをしてあげる」関係にならないこと。おとなも一人の参加者として、子どもの声に耳を傾け、一緒に考え、気付きを共有しながら場に関わってきました。

多世代が入り出す場所だからこそ、「子どもの想いを最優先にする」という考え方を、関わる人同士で共有しながら大切にしています。おとなも「支える側」としてではなく、その場に居合わせる一人として、子どもと同じ目線で関わっています。

居場所同士のつながりと、保護者への寄り添い

みんなのBASEは、宮城県内のフリースクールや居場所づくり団体が連携する「多様な学びを共につくる・みやぎネットワーク（みやネット）」に加盟し、団体同士が日頃からつながり、悩みや気付きを共有し合うことで、互いに支え合いながら活動を続けています。

「どの居場所にも共通する“同じ想い”があるから、子どもたちは体調や気持ちに合わせて複数の場所を行き来できるし、保護者にとっても『どこに行っても信頼できるおとながいる』という安心につながるんです」と瀬戸さんは話します。

フリースクールに通う子どもの保護者の中には、不安や緊張を抱えながら日々を過ごしている方も少なくありません。「まずはここに来て、子どもを安心して任せられる時間を持てたことが、お母さんたちの安心につながっている——そんな言葉もいただいています。お母さんがほっとできる時間を持てると、子どもも少しずつ元気になっていくんです」と瀬戸さんは語ります。

子どもたちへつなぐ未来



瀬戸さんが思い描く未来はシンプルです。

「ここを巣立っていった子どもたちが、いつか仲間として戻ってきてくれたらうれしい」。

みんなのBASEで育った子どもたちが、次の居場所をつくる担い手になっていく——そんな未来を、瀬戸さんは願っています。

© 公益財団法人仙台子ども財団